「心中天網島」初歩的解説

村田穆

前提一　あり来りの極く平凡な夫婦に、子供が二人。結婚して五年か十年。そんな時期に、夫は、若しくは妻は、よろめいたりつまづいたり、兎角に事故を起しやすいもの。といふ点は、貴族社会にも封建社会にも資本主義社会にも社会主義社会にも通じると共に、又それぞれの時代社会に特有のひずみもありませう。そのやうなあり来りの人間関係を、徳川封建社会の中で扱つたのが、「心中天網島」といふ作。

前提二　「心中天網島」は、心中といふ際物的興味の上に成り立つてゐます。従つて、心中以外の解決はあり得ないこと、その興味につられ、娯楽を求めて集るミーハー族を、出来るだけ多く吸収して、竹本座に儲けさせてやらねばならぬのが、近松の職業的責任。

前提三　形が商業採算を重視する大衆演劇で、中身があり来りの三角関係なら、これは浅薄安易な作柄となる危険をはらんでゐます。この種の作の大むね、その時限りで消滅する愚作にとどまる所以です。にも拘らず、この作が長い星霜に堪へたとしますなら、それ相応の値打ちがありさうに思はれます。としても、みせかけの甘さは避けられないでせうし、その甘さから、この作を小馬鹿にして、本質の値打ちを見損ねてはなりますまい。と共に、その値打ちを誇大視して、すべてを意味ありげに附会してもいけないのです。つまり、現代の大衆演劇に対するやうに、或ひは新劇に対するやうに、割切つて近松に対しては、間違ふのです。大衆演劇の甘つちよろいみせかけの中に、新劇以上の真剣な中身がこめられてゐるのが、近松の作なのです。

右の前提から、「心中天網島」の甘つちよろい衣裳をはいで、中身のすばらしさを取り出す作業を、極くあらあらしてみたいと思ひます。初歩的解説と名づける所以です。踏み出しの間違ひが、論をゆがめたり誤つたりするのを、いやといふほど見せつけられてゐるからです。

主人公の紙屋治兵衛といふ男。もし御承知なら、現在歌舞伎の「時雨の炬燵」を思ひ起して頂きたい。近松の原作の精神は抜き去つて、つまり、作品を骨抜きにして、そのショー的巧さを拡大したものながら、形は一応、原作の流れを酌むものです。あの色つぽさと弱々しさ、これこそ大衆演劇の主人公として、近松のミーハー族にサーヴィスするところなのです。治兵衛の、行動に辻褄があはず朦朧と

感情に押し流される、あはれにはかないさまは、観客に楽しく涙を流させる仕掛けなのです。といふことは、近松も亦治兵衛に同情したり支持したりしてゐることにはなりません。丁寧に読みますなら、近松は冷徹に描いて、寸毫の仮借もしてゐません。

上の巻、河庄の場で、茶屋女小春の侍客に話すのを立ち聞いて、かつとなつて、治兵衛は女を刺さうとしますその後で、その侍客実は兄孫右衛門が「ヤイ〳〵〳〵、其たわけからことおこる、人をたらすはゆうぢよのしやうばい、今めに見えたか、此孫右衛門はたつた今一げんにて女の心のそこを見る、二年あまりのなじみの女、心てい見付ぬうろたへ者、小はるをふむ足で、うろたへたおのれがこんじやうをなぜふまぬ、エ、ぜひもなや、弟とはいひながら三十におつかゝり、勘太郎お末といふ六ッと四ッの子の親、六間口の家ふみしめ、身だいつぶるゝわきまへなく、兄のいけんをうくる事か、云々」といふセリフには、治兵衛の性格について、近松の意見のまづ托されてゐるところです。

この作しばしば、治兵衛小春の真の愛情を賛美したとか、そのやうな真の愛情は封建社会にはゆるされず、その封建制に押し潰されるところを描いて、封建制に対する抵抗を示したとか、いふやうな意見が流行してゐるかに見えますが、果してさうでせうか、少しく丁寧に筋を辿つたがよいやうです。

治兵衛と従妹おさんとの結婚がどんな風にはじめられたかは記してありませんが、無理往生の心に染まぬ結婚をしたともうけとれません。「曾根崎心中」の如き、無理強ひの結婚なら、それは悲劇の因となるのですから、少くともそれを匂はすくらゐのことはあつてもよいはずです。ついでに、すべてにわたつて、悲劇の因を、そのやうに、外的なものに作為するよりは、内的なものに深めたのが、近松の漸進的な傾向であつたことを指摘しておきませう。加へて、中之巻の紙屋の場でおさんの「おととしの十月中のゐの子にこたつ明た祝義とて、まあ是こゝで枕ならべて此かた、女房のふところには鬼がすむかじやがすむか、二年といふ物すもりにしてやう〳〵はゝさまおぢ様のおかげで、むつまじいめをとらしいね物がたりもせう物と、たのしむ間もなくほんにむごいつれない云々」と歎き口説くところと、先記の孫右衛門の「二年あまりのなじみの女云々」と言ふところを照らして見ますなら、二年前までは治兵衛おさんは一通りの睦まじい夫婦だつたらしく、その睦まじかつた過去の思ひ出ゆゑに、おさんは貞実の限りを尽して、夫治兵衛の自分の懐に帰つて来るのを期待するのです。もし、はじめからよい加減の夫婦で、おさんに過去の睦まじい思ひ出がなければ、これほど切に夫を慕ひ貞実を尽すことは、あり難く思はれます。度々の引用で恐縮ながら、西鶴の「好色五人女」巻二の四「こけらは胸の焼付さら世帯」の「されば一切の女移り気なる物にしてうまき色咄しに現をぬかし天王寺の桜の散前藤のたなのさかりにうるはしき男にうかれかへりては一代やしなふ男を嫌ひぬ是ほど無理なる事なしそれより万の始末心を捨て大焼する竈をみず塩が水になるやらいらぬ所に油火をともすもかまはず身躰うすくなりて暇の明を待かねけるかやうのかたらひさりとは〳〵おそろし死別ては七日も立ぬに後夫をもとめさられては五度七度の縁づきさりとは口惜き下〳〵の心底なり上〳〵にはかりにもなき事ぞかし女の一生にひとりの男に身をまかせさはりあ

れば御若年にして河州の道明寺南都の法花寺にて出家をとげらるゝ事も有しになんぞかくし男をする女うき世にあまたあれ共男も名の立事を悲しみ沙汰なしに里へ帰しあるひは見付てさもしくも金銀の欲にふけて曖にして済し手ぬるく命をたすくるがゆへに此事のやみがたし世に神有むくひあり隠してもしるべし人おそるべき此道なり」といふのは、三十余年前の記述ながら、その風潮はそれほど変つてもゐますまい。そんな御時勢に、いかに観客意識を計算に入れたフィクションとはいへ、おさんは余りにも貞実に過ぎ、痛々し過ぎます。而も尚、それを敢へてしたところに、治兵衛の不実に対して、近松のこめた批難の切なところを察知せねばなりますまい。

兎もあれ、結婚後の数年、治兵衛おさんは一通りの睦まじい夫婦のやうでした。その数年、世帯にやつれ商ひにやつれた妻を次第になほざりにして、色売ることに専心する女に溺れることを、真の恋愛だなどと揚言するのは、愛の何かを知らぬタハゴト、といふより、愛情の冒瀆です。治兵衛を是認するなら、バーの女にたはけて、糟糠の妻を置き去りにするホワイトカラーにも喝采を送らねばならなくなりませう。愛欲の業の深さに驚く、といふのなら、又別ですが。

妻に責任は少しもないとまでは言へぬとしても、根本は、「其たわけからことおこる」のです。治兵衛の身勝手、愚かさ、無責任から事起るのです。愛情もしくは愛欲も、人間にとつて重要な要素であるに違ひありません。が、そんなことばかりを人間的と感服するのは、少し幼いぢやないでせうか。それはむしろ、本能的な動物的な根ざしの深いものだけに、それに流されないやうに、抵抗し苦脳することの方が、人間的といふに価するのぢやないかと思ふのです。責任とか誠実とか、むしろ精神の分野に属するはたらきが、人間にはより重要な要素ぢやないかと私は考へるのです。

なほ、中之巻の治兵衛を追ひます。小春が裏切つて、恋敵の金持太兵衛に就いたと考へて、治兵衛は小春を「人のかはきたちくしやう女」とののしり、その敗北を面目の失墜と歎き、「胸がさける身がもへる、エヽロおしい無念なあつい涙血の涙、ねばい涙を打こへねつてつの涙がこぼるゝ」と泣きます。ミーハー族の同情の涙をそそるところです。無妻の太兵衛に対して、有妻の治兵衛が女を張りあつて、自分のものとしようとしたことの是非はしばらく置くとしましても、この対立をめぐつて、学者或ひは町人の面目の重要性を説くのはいかがでせう。遊女を張りあつて敗れたことを面目の失墜と考へるのは、やくざな町人の面目感で、まつたうな町人はそのやうな面目感をこそ不面目とするでせう。「こゝの恥ははぢならず」と「冥途の飛脚」で梅川は言います。が、最も重要なことは、治兵衛がそのやうに歎き語る相手が、おさんであることなのです。小春が治兵衛を裏切つたといふなら、それは、治兵衛がおさんを裏切つたといふ事実を前提とし、その裏切り行為の過程に於いてのみ成立するといふことを思はねばならぬのです。而ももし小春が裏切つたとしても、金銭に買はれる女の金銭の切れめの離反と、妻子に責任を負ふべき男の身勝手な離反とは、その罪深さに比類を絶した隔りがあるはずです。治兵衛は小春を金銭で買ふ女としては遇してゐなかつたのだといふ説もありますが、それは身勝手な詭弁です。愛すれば、尚更、金銭に支配される女の身を思ひやつて、女の身の立ち行けるやうにしてやるのが、男の責任です。自分は無責任で、遊女

に誠実を求めようとするのは身勝手です。のみならず、その前に治兵衛は妻に誠実を尽さねばならぬはずなのです。

真の裏切り者は治兵衛自身であり、裏切られたのはおさんなのです。この、小春の裏切りといふやうな絵空事を通じて、治兵衛の裏切りを、鏡にかけるやうに鋭く描き出した近松の手腕の妙に驚かざるを得ないのです。これほど痛烈な批難の仕方がありませうか。治兵衛の身勝手、自分はそれほど意識しないとしても、かへって、それゆゑに、徹底したエゴイズムのすざまじさ、それはこの作を貫く頗る重要なモチーフなのです。

そのモチーフは、更に激しく高鳴ります。裏切つたと思つた小春の愛想尽かしが本心でないことを妻に教へられ、妻の支度した衣裳に身なりを整へ、妻の工面した金品を携へて、小春身請けの手附を打ちに出かけようとする心情は、どう説明すべきでせうか。「こなさんとのけいやくちがへ、おめ〳〵太兵衛にそふ物か、おなごは我人一むきに思ひかへしのない物、しにやるはいの〳〵」と小春を評した妻の言葉におびやかされもし、面目の失墜といふこともありましたらう。が、治兵衛が「手付渡してとりとめ請出して其後かこふて置か内へ入るゝにしてから、そなたは何と成ことぞ」と言ふのは重大な発言です。治兵衛が泣きながらさう言ふので、何となく哀れつぽく、観客は泣かされるでせうが、近松の本心は甘くはないのです。私は、先きに愛欲の業の深さといふやうないささか綺麗事に類する言ひ方もしましたが、真直ぐに言へば、近松は治兵衛にエゴイズムのすざまじさを追及してゐるのです。妻の誠実をこれほどに裏切る言ひ方はありますまい。小春を「請出して」親許へ送り帰すといふ方法こそ、今までのおさんに対する裏切り行為の唯一の償ひとなることに、治兵衛は心づかねばならぬのです。治兵衛こそ「人のかはきたちくしよう」男なのです。妻は相変らず棚上げにして、あくまでも小春と情を通じようとする治兵衛の本心が、無意識かのやうな表白で、おさんに無慚につきつけられるのです。

「アッアそうじや、ハテなんとせう子供のうばか、まゝたきか、ゐんきよ成共しませうとわつとさけびふししづむ」おさんの言動には、癒すことの出来ぬ、妻の最大の歎きがこめられてゐます。これを封建時代の妻の当然の地位かの如く説く学者もありますが、それは空想に過ぎないことは先きの西鶴の引用で事足りませう。実際別れようと思へば、何時でも別れられるので、おさんの父は早くから、むしろ別れることを望んでゐたのです。而も尚、おさんは別れようとしないのです。世の風潮が乱りがはしいものであれば、それだけにかへつて、近松は、あらゆる犠牲をはらつても、まさしく人を愛し抜かうとする人間の美しい心根を描きたかつたのです。人を愛することの苦しさ美しさ見事さは実はおさんに描かれてゐるので、その反対の醜いものの極地として描かれたのが治兵衛なのです。そのところを混同しては困るのです。

が、それほどの歎きに対しても、治兵衛の愛情は甦りません。「あまりにめうがおそろしい此治兵衛には親のばち天のばち、仏神のばちはあたらず共女房のばち一ッでもしやうらいはようないはづ、ゆるしてたもれと手を合くどきなげ」いたり、又、舅五左衛門が、おさんを離縁して連れ帰らうとしては、「御立腹の段尤共おわび申すはいぜんのこと、今日のたゞ今より何事もじひと思召、おさんにそ

はせて下されかし、たとへば治兵衛こつじきひにんの身となり、諸人の箸の余りにてしんみやうはつなぐ共、おさんはきつと上にすへうゐめ見せずつらいめさせず、そはねばならぬ大恩有」といふのです。

治兵衛はおさんに恩義を感じるといふのです。それに報いる道は、生活に苦労をさせないで、形式的に添ひ遂げるといふことなのです。その恩義を感じるといふことに甘えて、小春との仲は清算しようとはしないのです。

さて、おさんは舅に連れ去られ、おさんの工面した金品も舅に持ち去られるとなれば、治兵衛の生活は破綻するより他はないのです。愛情ゆゑの心中ではないのです。金さへあれば、小春を妾にして、楽しまうとするのです。その最も町人らしい俗物性を近松は厭ふのです。「長町女腹切」で、近松は、半七の伯母の言葉に托して「世間におほい心中も銀と不孝に名をながし、恋でしぬるはひとりもない」と言つてゐます。

その果て、下之巻の大長寺の情死となるのです。そこでも、小春はおさんに義理立てして、死場所を別にしようと言ふのに対して、治兵衛は、「ア、ぐちなこと計おさんはしうとに取かやされ、いとまをやれば他人とたにん、りべつの女に何ンのぎり、道すがらいふ通りこんどの〳〵ずんどこんどの先の世迄もめをとゝちぎる此ふたり、枕をならべしぬるにたれがそしるたがねたむ、」と押しつけるのです。泣いて、おさんの恩を謝した男とはまるで別人の豹変ぶりです。彼が泣いて恩を謝したのは、その場の感傷に流されただけなので、真に恩義を感じることすらないエゴイストなのです。そのあとで、小春にたしなめられて、出家の真似事して、二人、所と方法を変へて死にますが、これは治兵衛の翻意ではなくて、近松の救済でせう。

治兵衛は、色つぽくて弱々しくて感情的で、同情すべき人物かのやうに見えますが、それは、近松の職業的幻術なので、丁寧に筋を辿つてみれば、治兵衛といふ人物は、他人の好意に甘えて、自分のエゴイズムを貫き、それゆゑに自分ばかりか、身近かの者も破滅させるエゴイストとして、徹底的に描かれてゐることが明らかになりませう。性格破産すれすれのところにまで迫ひつめたエゴイズムのすざまじさには類稀なものがあります。

女主人公小春は、まるで違ひます。小春は金銭に支配される女として、ひどくみじめな立ち場にあるのです。封建支配ではありません。町人の、すべてを金銭で支配しようとする俗物根性の犠牲者なのです。「心中二枚絵草紙」の茶屋女お峰は、「わしらがいまの此つとめ、だてにもはでにも身のためでも一日かた時なる事か、親兄弟のいとしさゆへ、おもしろからぬつとめをもつらいと一度いひやらぬは、おや兄に苦をかけまいため」と言ひます。その犠牲は表向きはなくなつたやうに見えて、今もこの国を含めた文明諸国に強要されてゐるのです。西鶴の「銀が敵の世の中」なのです。そのぞうな環境の中で、彼女は、金銭に、即ち町人の俗物根性に精一杯の抵抗を示します。

その金銭支配の権化として出て来るのが、身すがらの太兵衛なのです。金銭ですべてを支配しようとするあくどい俗物根性には、近

松はもとより、ミーハー族といへども、真直な心には抵抗を感じるのです。それゆゑ、太兵衞は頗る憎むべき悪役として設定されてゐるのです。その最も憎むべき人物の最も憎らしいセリフの中から、「ハテ刀さすかさゝぬか、侍も町人もきやくは客、なんぼさいても五六本はさすまいし、ようさいて刀脇ざしたつた二本、云々」とか、「こちは町人刀さいたことはなけれど、おれが所にたくさんな新銀のひかりには少々の刀もねぢゆがめふと思ふ物云々」とかいふところを抜き出して、武士に叩頭することを潔しとしなかつた町人の意気とやら反撥とやらを示したものとかいふ風に説かれたのは、家永とかいふ人と記憶してゐますが、その浅薄幼稚さは、当時のミーハー観客の観賞力にも劣るやうです。その意味については、前にも書いたことがあります（拙稿『『心中天網島』の一齣」女子大国文第六号昭和三十二年六月発行）が、話の都合上、繰り返します。

この太兵衞の言ひ草は、侍に対する主張ではなくて、小春の侍客といふのを、治兵衞の仮装と考へてのことなのです。この引用の少し前に、「我ら女房子なければ、しうとなし親もなしおちもたず、身すがらの太兵衞と名をとつた男、色里でせんしやういふことは治兵衞めにかなはね共、かね持た計は太兵衞が勝た、かねの力でおしたらばのふつれ衆、何にかたふもしれまい、こよひの客も治兵衞めじやもらを〳〵、此身すがらがもらふた」とはじまるのです。それから、家永氏の引用箇所につづけて、前者には「侍ぐるめに小はる殿もらふた、ぬけつかくれつなされても、縁あればこそお出合申……紙屋の治兵衞、小はるぐるひが杉はらがみで、一ぶこばんしちり〳〵がみで、内のしんだいすきやれ紙の、はなもかまれぬ紙くず治兵衞云々」と、後者には「ちり紙屋めがうるしこし程なうすもと手で、此身すがらとはり合は慮外千万、さくらばしから中町くだりぞめいたら、どこぞでは紙くずふみにぢつてくりよ、云々」とあることからも、意味するところははつきりしませう。

而も、その侍客実は治兵衞の兄孫右衞門の変装であるにもかかはらず、びくついたり、後には散々なめにあはされるといふおまけまでついてゐるのです。弱者の強がり、劣等感の裏返しの気味も添はつてゐますが、本質的には、金銭で支配すべきでない愛情を、金銭で支配しようとした町人の俗物根性を制度化した色里の、典型的な俗物根性を発揮したものとしての太兵衞を描いて、近松は俗物根性の厳しい否定を寓したのです。こんな例は他にもあります。例へば、「心中万年草」に敵役作右衞門の「作右衞門程のむこは慮外ながら取にくい、くめの介は若衆で前がみは有ふが、おれが様に小ばんの前髪は有まい、あの様なやつらが娘子共をそゝのかし、京大坂にも有こと大かたは心中、ホゝいやなこと云々」と言ふのと同類です。

私は、先きにこの悲劇を、治兵衞の身勝手（ニゴイズム）に帰しましたが、その外的契機に、金銭の圧力があるのです。その第一は、治兵衞が小春を張りあつて、太兵衞の金力に打ち負かされたことです。次に、小春を請け出す手附けとして妻が絞り出した金品を舅五左衞門に取り上げられたのが、第二の契機なのです。つまり、金があれば一応片附くことなのです。といつて、それは契機にすぎません。もし金があれば、妻妾同居とか妾を別に囲ふとかといふ結果になり、それは当時の町人の家庭としては珍らしくないとしても、後の歌舞妓や人情本あたりにはしばしばそのやうな結末でめでたく収まるとしても、

人間的には破滅です。而も尚、それを望む心が、治兵衛にあつたことが悲劇の本質なのです。

もし金があれば、その場合は、逆に治兵衛が金力で愛情を支配する立場になりますので治兵衛が悪役になるのです。つまり形式上悪役になるかならぬかは、金があるかないかといふこと、金銭で愛情を支配し得たか否かといふに過ぎぬのです。主人公の善玉治兵衛と脇役の悪玉太兵衛といふのは、大衆演劇としての見せかけに過ぎぬので、近松の本意では、治兵衛も太兵衛も唾棄すべき俗物であることに変りはないのです。もつとつつこんだ言ひ方をすれば、悪の根源はむしろ治兵衛なので、太兵衛はその軽薄な分身に過ぎぬのです。

話を小春に帰します。小春は、繰り返しますが、町人の金銭支配の犠牲者なのです。「長町女腹切」の先きの引用につづけて、近松は「ながれの身にはとりわけて、かなしいことむごいこと、そこをしなぬが心中ぞや、しんじつ男かはゆくは五度あふものを三度あひ、二度を一度になす時は、おやかたもきげんよく、恋に身をうつこともない、」と書きます。これが自己保存に忠実な、所謂堅実な町人の考へといふものです。

色里の女と町人との色恋をすべて対等の真実の恋と考へ勝ちなのは、幼い見解です。武家は諸法度に「私不レ可レ締二婚姻一事」と規定され、上層町人もそれを猿真似して格式をつけようとしましたが、一般庶民は好きで出来合ふのが普通でした。今の恋愛結婚に近い、それよりもうすこしなまな肉体的な結びつきをした町人が、結婚とは別口に経済力で愛情を、といふより端的に肉体を支配し、享楽の具に供したのが、色里です。近世封建社会にあつては、色里以外に人間開放の場がなかつたなどいふやうな、気のふれたタハゴトを、何時ごろ誰が言ひはじめたのか知りませんが、若い学生までその口真似をするに至つては、憫然たらざるを得ません。

色里に真実の恋はあり得ないといふのではありません。偶然はどこにでもありはします。が、もともと、色里は男が金銭づくで女の肉体をもてあそびに行かうとする場所なのですし、色里の女はそれに無防禦無抵抗の女達なのです。女達はせめて、手管をめぐらし、男をたぶらかして、身心の早く消耗し尽さぬやうに計るのが、精一杯の抵抗なのです。遊女の誠が四角な卵に対比される所以です。色里に於ける真の恋といふのは、だから、嘘から出た真なのです。このやうな町人の男の風儀の乱れが、先きに引きました「好色五人女」に言ふ女の風儀の乱れに波及するのです。

色里の女は、だから随分えげつないのが、普通です。それだからこそ、生き伸びられるのです。「冥途の飛脚」や「博多小女郎浪枕」の女達の実説もそのやうでした。而も尚、西鶴や近松は、その女達を大むね同情深い筆で描いてゐますのは、その本質的な弱さに対する同情のせいなのです。そこには、すべてを金銭で支配しようとする町人の俗物根性に対する抵抗排撃がこめられてゐたのです。

治兵衛と小春の心中を、近松は同情深く描いたなどと評されてゐますが、治兵衛に対してはみせかけだけで、実は排撃してゐるので、同情を寄せてゐるのは小春の方だけだといふくらゐのことには、気づいてもらはねばなりません。はじめから金か恋か二者択一を迫られてゐる小春、金銭的に有力な太兵衛に従はず必然的に死の方向を進んだ小春、おさんに義理立てして治兵衛から去らうとした小春、

遂に情死に追ひ立てられても、死の直前までおさんに対する義理を立て通さうとした小春。小春は徹頭徹尾人間苦にあへぐ女として描かれてゐるのです。

次に、治兵衛の妻おさんに移ります。おさんをもう一人の主人公といひますか、善意の脇役に数へますか、それぞれに意見はあらうかと思ひますが、もと善意の脇役から成長したものには違ひありません。

近松世話物の脇役については、拙稿「『女殺油地獄』今昔」（立命館文学昭和三十八年十月号所収）であらあら述べましたので、その経緯は省略しますが、それらは、主人公を助けたり苦しめたり、主人公の悲劇的過程を彩る道具立ての一種に過ぎぬのです。ところが、おさんはそこから悲劇の中へ入りこんだのです。心中物は、元来が心中する二人の悲劇性が強調されてゐたのですが、心中する者同様に、といふよりも、心中する者以上に、心中しない者の悲劇でもあることを示したところに、この作の心中物に於ける新しさがあり、人間関係のより広くより深い展開に注目すべきなのです。むろん、近松はこの頃になつて、心中しない者も亦悲劇の人であることに心づいたといふのではありません。そんなことくらゐははじめから承知です。唯、はじめは、心中といふ観客の際物的興味に焦点をしぼつてゐたのが、観客のこの種の作に馴染むにつれて、中身を徐々に変へて行つたのです。その過程で、おさんの脇役から主人公への転換、悲劇の外側の人から悲劇の内側の人への変移は、主人公治兵衛のエゴイズムの厳しい追求と共に、頗る重要な意味をもつのです。

このおさんを超えて、脇役が主人公に完全に転換したのが「女殺油地獄」のお吉です。それにしても、心中の主人公治兵衛をここまで追ひつめれば、もはやこのやうな人物は、これまでは悲劇の主人公めかして、観客に強ひて取り繕つて来ました近松も、形式的な主人公の地位からも消さねばならなくなるのです。与兵衛は即ち治兵衛なのです。「女殺油地獄」は、この点からも、転機に立つものと言へませう。

「心中天網島」は、大衆演劇の頂点に立つ作であると共に、中身は完全にすりかへられてゐたことを知らねばならぬと思ひます。

この作を悲劇と考へますなら、形式的な主人公治兵衛は悪玉の脇役であり、脇役であるおさんが悲劇の主人公、小春が副主人公、といふのが、近松のこの作に托した意図だと思ふのです。

過去の愛情の幻にとり縋つて、一づに夫に尽さうとする捨身の人妻の誠意が、やくざな夫に裏切られて破滅に至る悲劇を主に、その巻き添えを喰つて死に追ひ込まれる茶屋女の悲劇を従に、意図されてゐると思はれるのです。治兵衛の死は悲劇でも何でもありはしないのです。近世風の大衆演劇のみせかけながら、本質的には近代劇のリアリズムに踏み込んでゐる作なのです。みせかけは近代劇で、中身は浅薄なこの国の新劇とは逆なのです。

その他、善玉の脇役の兄孫右衛門、治兵衛の伯母でもあるおさんの母、悪玉の脇役の太兵衛、端役の丁稚三五郎、下女の玉、治兵衛の子勘太郎お末、何れも例によつて巧みな使ひぶりといへませう。それらの中で、おさんの父で治兵衛の舅である五左衛門だけには、

一寸ふれておいたがよいかと思ひます。

彼は、おさんの実父として、おさんの幸福を願ふ人間なのです。父親の愛情は、善意の脇役としてこれまでの作につづいて見られるところです。愛して助けようとして、必ずしも助けることの出来ぬのはいつもの例ですが、先きにも述べましたやうに、悪役太兵衛の前因に対して、彼の行動が主人公を悲劇に追ひやる第二の契機となるやうな前例はないのです。善意が積極的に悲劇の要因となるといふことは、治兵衛よりもむろんおさんに対してですが、太兵衛の如き悪役の小道具紛ひの外因とは違つて、運命悲劇じみたところに達してゐるといふことなのです。もつとも、善意といつても、五左衛門が経済を軸にした物の考へ方しか出来なかつたことに、破綻の因があつたことは、先きに述べました通りなのですけれど。

人間の関係には、利害、感情、理性等々による各種の結びつきがあります。さうした結びつきにある限り、人間関係は常に危機にさらされてゐると言へませう。それを克服するものが信なのです。信頼とか信義とか誠実とか言ふものなのです。観客の娯楽に奉仕するみせかけの甘つちよろさの中に、治兵衛おさん小春の人間関係の危機を、大まかに言へば、治兵衛のエゴイズムのすざまじさと小春の俗物根性に対する抵抗の切なさと、おさんの愛することの苦しさ美しさ見事さとなどをめぐつて、鋭く深く抉り出してみせたところに、「心中天網島」の値打ちがあると思ふのです。観客が心の底をゆすぶられたのは、無意識的にもせよ、その点にあつたので、そこにこの作の古典として生きつづける理由があるのです。それに反して、「時雨の炬燵」は、この本質的なものを失つて、観客の一時の娯楽に奉仕するだけのものになり下つたので、これは洗錬された娯楽としてショーとしての値打ちをもつて、これからも生きつづけるでせうが、それは真の意味の芸術ではないのです。人生を豊かにする深い叡智はかけらももつてゐないからです。

ついでをもつて、一事を加へておきます。「心中天網島」の原型のやうな作に「重井筒」があります。この両者を比較しますと、近松の「心中天網島」にかけた突つ込みの深さがわかりませう。「重井筒」は佳作ですが、「心中天網島」は群を抜く名作です。別の機会に譲ります。

初歩的解説を少しはみ出したかも知れません。まどろこしい点はお見許しを頂きたく。

（三十八年十月稿）